

横須賀市における谷戸の景観保全に関する研究

—「道」における景観特性と視覚構造を通じて—

A Study on Scenery Preservation of YATO in Yokosuka City

—About the Scenery Characteristics and Visionary Structure of “Roads”—

森 貴規**, 横内憲久***, 岡田智秀***

By Takanori MORI **, Norihisa YOKOUCHI ***, Tomohide OKADA ***

1. 研究背景および目的

神奈川県横須賀市は、隣接する大都市横浜とは異なり、多くの緑で覆われた丘陵が存在し、三方を海に囲まれている都市である¹⁾。その横須賀市において、とくに特徴的な空間を構成する谷戸²⁾の景観的価値は、安藤広重が武相名所旅絵日記³⁾に記していることから極めて高いものと理解できよう(図-1)。しかし現在、この谷戸では、丘陵の斜面地や上部において地形を大きく改変する宅地開発が進行しており、このままでは横須賀市を象徴する谷戸の景観の魅力が失われてしまうことが危惧される。

そこで本研究は、海と丘陵を感じられる横須賀市らしい街並みを今後も継承していくべきであるという観点から、横須賀市の特徴的な地形である谷戸の空間的特徴を捉えるとともに、人々に谷戸の景観的魅力を日常的に享受させるうえで重要な視点場であり、空間的骨格となる谷戸地域の「道」⁴⁾を対象として、「道」における谷戸の景観特性と視覚構造を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、市内の中で最も古くから宅地が立地し、長きに渡り谷戸と住民が関わり続けている東海岸北部の谷戸地域⁵⁾を調査対象とする(図-2)。谷戸地域の抽出方法としては、横須賀市の谷戸の特徴が記述された文献^{2), 6)~12)}を通じて横須賀市の谷戸地形の空間的特徴(谷戸らしさ)を捉え、その特徴を有する地域を市内の丘陵の地形情報(位置、標高等)が明示された「環境情報図」¹³⁾から抽出する。次に、

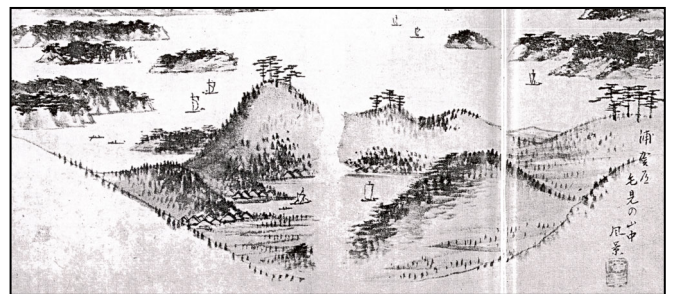


図-1 「浦賀道毛見の山中風景」(広重武相名所旅絵日記)



図-2 調査対象地

表-1 調査概要

調査方法	文献調査	図面分析	現地踏査
調査日	2003年8月28日~ 2004年3月20日	2003年8月28日~ 2004年4月18日	2003年 9月10日~12月23日 晴天時:計22日
調査対象	横須賀市の地形学 や民俗学等の文献	環境情報図、地形 図、都市計画基本図	図面分析より抽出 した東海岸北部の 谷戸15地域
調査内容	谷戸地形の空間的 特徴を把握するこ とができる記載事 項を捉える。	図面分析より「道」 の地形的位置と視 対象までの視角や 視距離を捉える。	文献調査より抽出し た横須賀市の谷戸ら しさを視対象とした 景観特性を把握する。

抽出した谷戸地域において谷戸らしさを形成する要因を明らかにするため、調査対象地域に備わる「道」の現地踏査と「地形図」¹⁴⁾の分析により、「道」において谷戸の空間的特徴が明確に視認できる視点場を捉え、その地形的位置や景観特性、景観的役割を明らかにする。さらに、これらの景観特性や景観的役割について、その解釈の妥当性を確認するため、人間の視知覚特性⁽¹⁾等を用いた考察を行う⁽²⁾(表-1)。

3. 結果および考察

(1)横須賀市における谷戸らしさ

横須賀市における谷戸らしさを捉えるため、横須賀市教育委員会発行の小学校資料集や市史等の8つの文献^{2), 6)~12)}において谷戸に関する記述を分析し

*Keywords: 横須賀市, 谷戸, 景観, 道, 地域計画

**学生会員, 日本大学大学院理工学研究科海洋建築工学専攻

***正会員, 工博, 日本大学理工学部海洋建築工学科

(千葉県船橋市習志野台 7-24-1, TEL&FAX047-469-5427)

た。その結果、8 文献すべてにみられたのは、「学校山や税関山・水道山と呼ばれる丘陵があり、その周囲の八十八谷戸、アメ谷戸、中谷戸、柿の谷戸、栗の谷戸の中に家々が点在していました。」⁷⁾という記述のように「山・丘陵」「宅地」を表したものである。これに次いで多かったのは、「山々に登ると必ず海が見える。」⁹⁾という記述のように「海」を表したものであり、これは半数以上の6 文献においてみられた。これらのことから、横須賀市の谷戸らしきとは、「丘陵」に囲まれた「谷戸低部内に宅地が立ち並び」、その先には「海」が広がっているという空間状況であることが明らかになった。

(2) 「道」における谷戸の景観特性と視覚構造

上述した谷戸の特徴を有する市内の地域を「環境情報図」を用いて抽出した結果、15 地域が得られた(図-3)。これらにおいて地形図分析と現地踏査により、上述した谷戸の特徴が享受できた「道」を、地形的位置、景観特性およびその景観的役割の観点から8つの型に分類した。その結果を型ごとに示したものが図-4であり、その空間分布状況を概念図として図-5に示す。また、図-6は、各型の視覚構造(視角および視距離)を示したものである。以降では、これらを通じて型ごとに考察を行う。

①「谷戸の枝道」

図-4、5より「①谷戸の枝道」の特徴は、狭幅員かつ袋小路になっている平坦な小道であり、これは数軒の家が密集しているため、「谷戸低部内における宅地」の生活景がみられるという景観特性を有する。そこで、この景観特性を成り立たせている横須賀市の谷戸を特徴づける「谷戸低部内の宅地」を視対象とした場合の空間構成を計測した結果、「道」の幅員が約1~2mであり、これと、現地踏査において計測した建築物の壁面が2.6~2.8mであることから、 $D/H=0.4\sim 0.7$ となる。この値は「近接した感じとなり、狭苦しくなるとされる値($D/H < 1$)」¹⁵⁾を意味する。このことより「谷戸の枝道」は、その狭小さから私的空間(私道)の雰囲気を持ち、密集する「宅地」の生活感が感じられる一方、その親密さから部外者にとっては進入を拒む役割を持つと考える。

②「谷戸脇の道」

これは、谷戸低部を囲む丘陵の斜面上部の遷急点

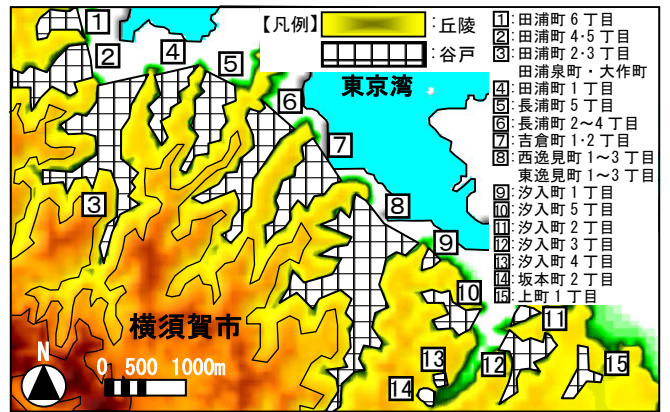


図-3 東海岸北部における谷戸の位置 【注】図中の番号は図-4、6と対応する。

(傾斜角度が急になる地点)付近を通る「道」であるため、「谷戸低部内の宅地」を常に俯瞰景として一望できる。その俯瞰景は、図-6より計測値のほぼ全体が俯角 $10\sim 30^\circ$ に含まれることがわかる。これは一般的に、「都市を眺望するにあたり視覚的に最も重要な領域である俯角 $10\sim 30^\circ$ 」¹⁶⁾と一致する。したがって、「谷戸脇の道」の景観的役割は、丘陵から「宅地」への俯瞰景により、その宅地の広がりや印象的に眺められることから、当該地域の領域を認知させるものとする。これは国見といわれる行為と同様に自分たちが暮らす土地を見下ろしたいという人間の本能的欲求を満たす¹⁷⁾役割を有しているといえる。

③「谷戸つなぎの峠」

この「道」は、谷戸低部から丘陵上部に登り、丘陵の峠を通ることにより、「谷戸低部内の宅地」を俯瞰景で一望することができ、峠を過ぎると視界が一挙に開け、再び俯瞰景で隣接する新たな「谷戸低部の宅地」を一望できる。そこで2つの「谷戸低部内の宅地」を対象として、俯角を計測した結果、計測値全体の約8割が $10\sim 27^\circ$ に含まれることがわかる。この俯角は前述した「都市を眺望するうえで最も重要な俯角 $10\sim 30^\circ$ 」¹⁶⁾と一致する。これより、「谷戸つなぎの峠」は、当該地域の生活領域の認知に加え、峠を挟んで2つの「宅地」の広がりが望めることより、2つの空間に対する転換点の役割も持つと考える。

④「谷戸すその道」

この「道」は、遷緩点(傾斜角度が緩やかになる地点)付近の微高地を通るため、丘陵上部ほどの一望性はないが、「谷戸低部内の宅地」の色とりどりの屋根が近距離で望め、同時に「丘陵」も仰視できることより宅地と丘陵の一体感を享受することができる。この「宅地」は屋根の表情が間近に望めることで印象的

類型	事例写真 該当地区	特徴	類型	事例写真 該当地区	特徴
① 谷戸の枝道		●地形的位置 平坦な場所に位置し、数軒の家が密集した枝道。 ●景観特性 「谷戸低部内」の密集から「宅地」の生活景が望める。 ●景観的役割 外部者にとってその進入を拒む。	② 谷戸脇の道		●地形的位置 斜面上部の選急点付近を通る道。 ●景観特性 「谷戸低部内」の「宅地」を常に一望できる。 ●景観的役割 宅地の広がりから、当該地域の領域を認知させる。
③ 谷戸つなぎの峠		●地形的位置 谷戸と谷戸の間の「丘陵」の尾根線上の峠を通る道。 ●景観特性 隣り合う2つ「谷戸低部内」の宅地を俯瞰景で一瞥できる。 ●景観的役割 生活領域の認知に加え、転換点の役割。	④ 谷戸すその道		●地形的位置 斜面の遷緩点付近であり、微高地を通る道。 ●景観特性 「谷戸低部内」の「宅地」と「丘陵」の一体感を楽しむことができる。 ●景観的役割 領域の認知に加え、「丘陵」の仰視から空間定位の役割。
⑤ 谷戸の中道		●地形的位置 谷筋の商店街の中心を通り、延長方向に長く、高線的な道。 ●景観特性 「丘陵」が仰瞰で見通せ、町の交流風景を享受できる。 ●景観的役割 空間定位に加え、町のにぎわいを受容。	⑥ 谷戸奥の峠		●地形的位置 斜面を通る谷戸の最奥の道。 ●景観特性 「谷戸低部内」の「宅地」と「海」を同時に一望できる。 ●景観的役割 海辺のまちであることを認知させる。
⑦ 鼻先の峠		●地形的位置 岬のように突き出した先端部の峠を通る道。 ●景観特性 隣り合う2つ「谷戸低部内」の宅地を一瞥でき、峠では劇的に「海」が望める。 ●景観的役割 転換点に加え、海辺のまちを印象づける。	⑧ 谷戸中の辻		●地形的位置 異なる2つの小谷戸の境にある交差点。 ●景観特性 「丘陵」が仰瞰で際立ち、交差点の生活景を望める。 ●景観的役割 「丘陵」に囲繞され、空間定位に加え、たまり空間となる。

図-4 各型の事例写真と該当地区およびその特徴 【凡例】

○：主対象 【注】：図中の番号は図-3、5~6と対応する。

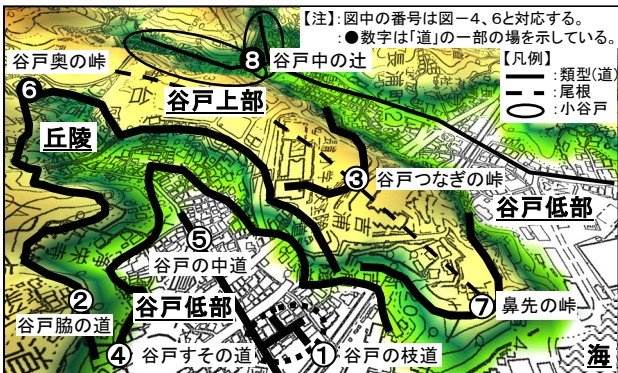


図-5 各型の空間分布状況(概念図)

な姿を創出していることから、その視距離を計測した結果、20~80mにあることがわかった(図-6)。この値は一般的に、「建築として印象に残る視距離30~100m」¹⁸⁾とほぼ一致する。一方、「丘陵」を視対象にした場合、その仰角が10~17°である。この仰角は、「山腹斜面が壁面的に立ち現れ、山容によほどの魅力が無い限り背景として意識される仰角20°」¹⁹⁾までには至らないことから、「丘陵」が主対象となる可能性が高い。これより、「谷戸すその道」は、当

該地域の生活領域の認知に加え、「丘陵」を主対象として仰視できることから空間定位(自己の地理的位置の認識)の役割も有していよう。

⑤「谷戸の中道」

「谷戸の中道」は、他の道よりも広幅員(約5~10m)かつ平坦で直線的であるため、延長方向が長く、その延長方向では「丘陵」が仰瞰として見通せる。さらに、町の商店街が立ち並び谷戸低部内における町のにぎやかさ(多数の人々の交流)を享受できる。こうした状況は、図-6より「丘陵」の仰角6~15°、視距離が約150~600mであることがわかる。この仰角は一般的に、「丘陵のスカイライン・山腹・山容等を見上とする山にとって最も好ましく、昔から親しまれてきた名山に多い仰角9°」¹⁹⁾を含み、視距離においては、「個々の木々がテクスチャーの単位になり、単一の山ではなく地形を形づくる山並みとして視認される中景域340m以遠」²⁰⁾が半数以上を占める。

類型	視角	0°	5°	10°	15°	20°	25°	30°
②谷戸脇の道(俯角)				2●	1●3●5●15●	8●12●7●	10●	9●13●14●16●
③谷戸つなぎの峠(俯角)			11●4●8●	8●12●3●9●	6●	8●●10●	7●	5●
④谷戸すその道(仰角)			2△	5△	1△4△6△8△	11△	13△	14△
⑤谷戸の中道(仰角)			12△3△	8△	15△	2△	4△	10△
⑥谷戸奥の峠(俯角)			2●	11●4●12●7●	8●	9●		
⑦鼻先の峠(俯角)			6●7●8●9●	10●				
⑧谷戸中の辻(仰角)					8●	2●3●7●		
類型	視距離	0m	100m	200m	300m	400m	500m	600m
④谷戸すその道		10●4●	13●11●8●14●5●16●●2●					
⑤谷戸の中道				10●	14●	6●	12●●5●	2●
⑧谷戸中の辻			2●	10●	3●8●			

図-6 各型を成り立たせている主対象の視角・視距離 【凡例：視対象 ●：宅地 ○：海 △：丘陵】 【注】：図中の番号は図-3～5と対応する。

これらより、「谷戸の中道」は前述した空間定位に加え、谷戸低部内の住民間の交流風景が視認でき、その町のにぎわいも享受させよう。

⑥「谷戸奥の峠」

この型は、谷戸の最奥に位置することから、「谷戸低部内の宅地」と「海」を同時に俯瞰景で一望できる。そこで、この俯角をみると図-6より3～8°にあることがわかる。この俯角は一般的に「都市全体の特徴を一瞥するうえで、また、水面を印象深く眺めるうえで重要な遠景領域である俯角2～8°」¹⁶⁾を満たしている。これより、この「道」は、横須賀市が海辺のまちであることを印象づける役割を有しているといえよう。

⑦「鼻先の峠」

これは、岬のように海に向けて突き出た谷戸先端部の峠を通る「道」である。これにより、「谷戸低部内の宅地」を一望でき、先端部の峠では特に劇的に「海」への俯瞰景が望め、そして、隣接する「谷戸低部内」を再び一望することができるシークエンスとなっている。そこで、「海」を視対象とした場合の俯角は、図-6より約1～7°である。これは、前述したように「水面を印象深く眺めるうえで重要な遠景領域2～8°」¹⁶⁾に含まれる。これより、この「道」は「③谷戸つなぎの峠」同様、異なる空間に対する転換点の役割に加え、「海」を印象づける要素となっていよう。

⑧「谷戸中の辻」

これは、谷戸の谷筋において、丘陵によって分断された異なる2つの小谷戸の交差点にあるため、「丘陵」が仰視により際立ち、さらに、交差点の生活景(人々の交流)をみることができ。この景観特性を成り立たせる「丘陵」は、仰角がおおむね15～20°にある。この仰角は、前述したように「背景として意識される仰角20°」¹⁹⁾までには至らず、「丘陵」が主対象となる可能性が高い。また、その視距離は110～

200mである。これは、「樹木の1本1本の葉・枝振りなどの樹木の特徴がわかる近景域340m以内」²⁰⁾であり、「丘陵」が間近に捉えられることから生じる圍繞感が享受できる。これよりこの「道」は、「丘陵」を仰視することで生じる空間定位のほか、「辻」空間の公園といった現地の実用例にもあるように、小さな広場的なたまり空間の役割も有していよう。

4. まとめ

本研究では、横須賀市の谷戸を対象として、横須賀市の谷戸らしさが「(三方を囲む)丘陵」「谷戸低部内の宅地」「海への眺望」であることを捉えた。また、「道」から谷戸らしさを形成する3つの要素を視対象とした景観特性や景観的役割から8つの類型を抽出し、その景観特性等を成り立たせている視角および視距離等の視覚構造を解明した。その結果、本研究で捉えた景観特性や景観的役割は、人間の視知覚特性からみて、その解釈が妥当であることを考察した。これより、横須賀市の谷戸らしさを今後も存続させていくためには、本研究結果の数値(視覚構造)を指標とし、それを保持することが重要になる。

【補注】
 (1) 人間が対象を眺める場合の人間の目に備わる基本的な特性の総称(文献20)。
 (2) 各「道」において明確に当該視対象が享受される場を視点場として、都市計画基本図(文献21)を用い、視角および視距離の計測を行った。

【引用・参考文献】
 1) 横須賀市企画調整部企画調整課：「横須賀市基本構想・基本計画」, 横須賀市, p. 24, 1998. 6
 2) 横須賀市教育委員会：「よこすか」, 図書印刷, p. 10, 2002. 4
 3) 嵯崎宗重：「広重武相名所旅絵日記」, 鹿島出版会, pp. 74-75, 1976. 4
 4) 土木学会編：「街路の景観設計」, 技報堂出版, p. 14, 1985. 12
 5) 森貴規ほか2名：「横須賀市における宅地立地がもたらす地形への影響に関する研究」, 日本沿岸域学会研究討論会, pp. 69-72, 2003. 7
 6) 横須賀市市長室広報課：「古老が語るふるさとの歴史～追浜篇」, 横須賀市, p. 28, pp. 30-31, p. 43, p. 49, p. 56, p. 59, p. 92, p. 277, 1981. 3
 7) 横須賀市市長室広報課：「古老が語るふるさとの歴史～逸見篇」, 横須賀市, p. 6, p. 9, p. 10, 1981. 3
 8) 辻井善弥：「ふるさとをみなおそう」, ヨコスカファミリークラブ加盟店会, p. 81, 1987. 8
 9) 辻井善弥：「三浦半島 その風土と歴史を訪ねて」, 有峰書店新社, p. 7, 1984. 11
 10) 高橋森一ほか6名：「三浦半島の歴史をたずねて」, 横須賀文化協会, p. 263, 1974. 1
 11) 横須賀市：「横須賀市史 上巻」, 横須賀市, p. 11, p. 76, p. 142, 1988. 12
 12) 樋口忠彦：「横須賀市風物百選」, 横山和夫, p. 31, 1978. 3
 13) 横須賀市環境保全全部環境管理課：「横須賀市環境情報図(20000分の1)」, リジオナルプランニングチーム, 1997
 14) 国土地理院：「地形図 10000分の1(横須賀、追浜)」, 国土地理院, 1996
 15) 芦原義信：「街並みの美学」, 岩波書店, p. 69, 1990. 3
 16) 篠原修：「新体系土木工学 59 土木景観計画」, 技報堂出版, p. 94, 1982. 6
 17) 樋口忠彦：「日本の景観」, 筑摩書房, p. 152, 1993. 1
 18) 戸沼幸市：「人間尺度論」, 彰国社, p. 175, 1978. 6
 19) 樋口忠彦：「景観の構造」, 技報堂出版, p. 62, 1975. 10
 20) 景観デザイン研究会：「景観用語事典」, 彰国社, p. 42, p. 44, 1998. 11
 21) 横須賀市役所：「横須賀市計画基本図 No. 8-9, 13-14(2500分の1)」, パスコ調製, 2000